

## 第4回アイヌの伝統的生活空間の再生事業運営諮問委員会概要

日時：平成19年2月26日(月)14:00~15:40

場所：北海道立アイヌ民族文化研究センター会議室

委員：加藤忠、川奈野惣七、佐々木高明(委員長)、佐々木利和

事務局：国土交通省：柘植アイヌ施策室長ほか

文化庁：堀内伝統文化課専門官

説明者：アイヌ文化振興財団：本間事務局次長

白老町：久慈参事

オブザーバー：北海道：富舛環境生活部次長ほか

アイヌ文化振興財団：天池事務局長ほか

北海道ウタリ協会：佐藤事務局長

白老町：煤孫助役ほか

### 議 事

佐々木委員長：本日は第4回目の委員会であるが、年度末の忙しい中、委員の皆さんにお集まりいただき御礼申し上げます。本日は大きく2つの議題があり、第1の議題は白老におけるイオルの18年度事業の報告と19年度事業実施計画について、それぞれ白老町及びアイヌ文化振興財団から説明していただく。第2の議題は、従来問題になっていたネットワークについて、事務局から説明していただき、アイヌの皆さんの協議についても報告いただくこととしたい。3月末に第5回目の諮問委員会を開催するので、次回の委員会に向けて収斂していくような報告と審議をお願いしたい。

それでは、第1議題を進めていただきたい。

白老町(久慈参事)：それでは、18年度の事業実施について中間報告させていただく。既に委員の皆様には現場等を見ていただいたので、大体イメージが浮かんでいると思うので、どのくらいの日数がかかったのかということも踏まえて説明したい。

説明の前に、若干感想を申し上げたいと思う。イオル事業は長年の懸案だったということで、そういう皆さんの熱い思いを胸に抱きながら実施したところである。失敗は許されないと若干のとまどいもあったが、一生懸命努力をしたと思っている。4月からスタートしたばかりであるが、事業を始めるに当たっていろいろ準備があった。そのような中で、木を植えるにしても、どの土地にどのような目的でどのような樹種を植えるか17年の10月から議論しており、このような基礎がなかったら順調に進まなかったと思う。

(平成18年度事業の実施状況について説明。)

来年度についても、イオル事業がいろいろな形でさらに展開をしていって、自然素材の植栽だけではなく、アイヌ文化の本筋にいくことがこれから必要なことではないかと実感しているし、佐々木委員長も委員の皆さんも、そういう方向で理解をいただきたいと考えている。

アイヌ文化振興財団(本間事務局次長)：続いて、平成19年度アイヌの伝統的生活空間の再生事業に関する実施計画の骨子について説明させていただく。

(資料1に基づき説明。)

佐々木委員長：白老町とアイヌ文化振興財団からそれぞれ説明があったが、いずれにしてもイオルについては「アイヌの伝統的生活空間の再生に関する基本構想」というものが既にでき上がっている。先ほど、今後はこのようにしていきたいという話があったが、基本構想というものが既にあるので、今さらどうしたいというのではなく、基本構想に沿って事業を展開していただ

くという話である。そういうことをまず一つはっきりしておきます。

それから、このイオル事業はアイヌ文化振興法に基づく事業である。アイヌ文化振興法に基づく事業というのは、その事業を行うために国が唯一の指定法人としてアイヌ文化振興財団を設定した訳であるから、当然アイヌ文化振興財団が事業主体として行うべきものであり、白老町の方に今年度負担がかかりすぎたのは少し問題であったかと思う。そういう点では、これは法律の定めるところであるから、アイヌ文化振興財団が主体的に本事業を進めていただくという意味で、来年度の実施計画についてアイヌ文化振興財団の方で立案・説明していただいたことは結構なことと思う。

そういうわけで、今年の話と来年の話。これは正直に言って大きい方向性がきちんとしていて、その方向性の中で何かができたら、ということになる。その上で、当然のことながら次にやるべきことが見えてくるはずだが、その方向性がいま一つ不明な点があるので、改めてその辺について議論いただいた後、第二議題に移りたいと思う。今の二つの報告について、19年度の計画は次回改めて議論しなければならないが、今日のところで加藤委員はいかがか。

加藤委員：ウタリ協会の会議において一番議論になったのは、人材の育成である。このことは、資料を見ても山のことばかりであるから、山だけで2年間進めてしまうのかなという気がするのだが、それではちょっといけないのではないかと思う。人材の育成をどうするか、木は植えたが、30年後、40年後、50年後にやる人がいないということになり得るのではないか。今、一番先にやらなければならないのは、北海道の先祖に対することだと思う。この先祖に対して何をすべきかということ、カムイノミである。このカムイノミをやる人がいない。限られた人、点々と言うぐらいしかいない。この人材の育成について、木を植えるより先にやらないといけないのではないかという意見が、この前のウタリ協会の会議の中であった。まずそれをやっていただきたいということを、ぜひ諮問委員会でご確認くださいと言われたが、本当の話、今、カムイノミをやる人がいない。先祖に対することをやる人がいないという状況である。

佐々木委員長：非常に重要な話であるが、私は正直に言うと、カムイノミをやる方々については、それこそウタリ協会が、つまり、アイヌの中でアイヌ自身が第一に取り組まなければならないことだと思う。これは伝統的生活空間の復元とはちょっと別の話である。伝統的生活空間の復元ということから考えると、その伝統的生活空間をちゃんと維持管理していくには、それを担う方がアイヌ文化の伝統というものを理解していなければいけないということである。だから、それならそうですが、いきなりカムイノミのできる人をちゃんと養成しましょうという話は、これはむしろウタリ協会自身のお話であって、こちらとはちょっと切り離して考えた方がいい。そうしないと、非常に状況がややこしくなってくる。むしろ伝統的生活空間をつくることはいいことで、それがなかったらアイヌ文化の継承・発展・展開はない。だからそれは作りましょうと、そこまでは行ったのです。それをつくっても、それを維持管理し、あるいはそれをうまく利用していくためには、アイヌ文化の伝承をみずから持ち、そしてイオルの空間を維持管理していくような人をきちんとつくる必要がある。そこへ話を持っていかないと、今カムイノミの話でいくと状況が非常に難しい。

加藤委員：そのことは意見ということである。人材の育成ということで、すべてアイヌはもろもろに魂が宿る、このことはもう皆さん十二分にわかっていることであり、何をやるのにも、事を始めるには必ずカムイノミが必要である。

佐々木委員長：人材の育成については、そのカムイノミという話で言われるよりは、アイヌ文化の伝承の心を十分に持った人、あるいはアイヌ文化の伝承に非常に理解があって、その伝承というものを展開できるような人がいると、同時にイオルの管理運営にもつながる。管理運営はそういう心を持った方にしかできない。

加藤委員：管理運営はそういう心を持っていなければできないのだが、そのことをやる仕組みが必要である。

佐々木委員長：はい。ちょっと考えていかなければならない。

加藤委員：考えていかなければならないと思う。

佐々木委員長：伝統的生活空間の再生につなげたところで人材育成の話を展開していただくと、話がより具体的になってくると思う。

事務局：今の話を少し説明すると、委員長が最後におっしゃったイオルの中での人材育成もやっていかなければならないと思っている。今回、19年度の実施計画の骨子では大きく二つの柱がある。一つ目はイオルの森の形成ということで、これは植えた木をどう循環させていくのかというのを、春植えを中心として木を植えながらルールづくりをやっていこうというものである。もう一つの大きな柱としては、アイヌの人たちが中心となった伝承活動等である。この中で、イオルの森を舞台にしてどのような文化伝承活動をやっていけばよいのかということ、アイヌの人たちの意見を伺いながら進めていきたいと考えており、人材の育成についても、そういう中でやっていける部分もあるかと思う。もちろん、財団の既存事業の中でもやっていかないといけない話であるが。

加藤委員：いずれにせよ、例えばアイヌの工芸にしても、もうほとんど人材がいなくなっている。これも伝承の関係である。

佐々木委員長：せっかく森をつくっても、その森を使う人が誰もいないと困る。意図は同じであるが、なるべくイオルの再生につなげながら話をした方がより説得的だと思う。

加藤委員：意図は同じである。

佐々木委員長：ほかに、川奈野委員はいかがか。

川奈野委員：余り難しいことは言えないが、この前のウタリ協会の会議では、イオルのネットワークについてアイヌ文化振興財団の方も一生懸命やるということを書いていたが、ここについて本当にそのことを守れるのかという話があった。

佐々木委員長：ネットワークの話は、できれば次の議題で扱いたい。そのときにまた議論をすることとして、今の議題では、なるべくなら白老町の報告と、来年の実施計画の取組について検討していただく方がよいと思う。

加藤委員：骨子の関係でもう一つ。この体験交流の関係では、やはり体験から人材育成、これはもちろんつながる話である。イオルでは山のこともあるが、委員長がおっしゃるように、海のこともあるし、川のこともあるし、ということいろいろ取り組んできたが、川のサケにしても処理する場所が必要である。今はそれこそ時代が変わって、きちんと処理しなければならない。でたらめでその辺で処理したらとんでもないことになる。その処理したものをどうするか。では、それを加工する、それを保存するということはどうしてもこのような事業には前もって必要になると思っていたが、そういう意味では、山のことをやるにしてもそういったものが必要と考えている。その点について事務局としてはいかがか。

事務局：今回の実施計画の文化伝承活動の中では、まず関係者と議論を始めたいと考えている。加藤委員がおっしゃったようなことも、まずは今どのような文化伝承活動をやっていて、アイヌの人たちがどのような意向を持っているのか十分に議論して、では、それに対してどういう支援をしていけばよいのかということも話し合っていきたい。体験交流についても限られた予算なので、有効に使うためにどのような体験交流が必要なのか、十分に話し合っていく中で積み上げていきたい。それで一部試行的に実施するとき、加工や処理を行う場所の問題も、限られた予算の中でできることもあるし、将来的な課題として残ることもあるのだろうと思う。まずはアイヌの人たちが中心になって、伝承活動をどうしていくのか話し合う場をアイヌ文化

振興財団が中心になってつくっていくので、そこで意見交換をしていただければと思っている。

佐々木委員長：座長があまり意見を言っはいけないのだが、ちょっと私の印象を申し上げると、白老町の現地をこの前見学させていただいて、皆さん大変熱心に対応しているので、そういう点では一生懸命やっていることがよくわかって感動した。ただ、あの計画全体を見ると、非常に規模が小さい。木の植栽をしたところから全体に広げて、もうちょっと大きなアイヌの森を計画するとか、あるいは海岸も砂丘の一部ではなく、あの砂丘、湿地から全体に及ぼすような計画が必要です。恐らくアイヌの方はあの砂丘や湿地の一带で漁業も採取もやっていたので、そのような文化を生み出した環境の復元ということがテーマである。私たちはイオル構想をやってきたときから、そのようなアイヌの文化を生み出した森と、それを巡る自然の大規模な復元と再生が必要と考えていた。ポロト湖畔は、万葉集に出てくる植物が全部そこに行ったらわかるという奈良の万葉公園のように、教育効果があるものとして理解するが、あれはアイヌの森ではなく教材林であり、10年来言ってきたイオルのアイデアとは離れている。だから、もう少しアイヌ文化を生み出してきた自然というものを考えていただければと思う。木を植栽されたところも、一生懸命植栽されているが、木が密植しすぎて、10年、20年経ったら密林になるのではないかと思う。その辺の将来の見通しが、今の白老町のプランからは感じられない。白老町に急に話が行ったからとても無理だったのはわからないではないので、決して白老町の事務局を責めることはできないが、やはりもうちょっと長い見通し、今すぐこうしろというのではなくて、まずは森の将来の見通し、そしてその中で重要な人材の育成とか、長い計画で物事の話をしていかないといけないし、次にネットワークという話が出てきたら、では白老町とその次の地域とはどのように役割分担をするのか。何もかも白老町でと言うのもいけない。長い目で見た計画、時間的にも空間的にもかなり広がったものとしての計画を考えて、その中で今年度はこの部分を実施するという形にさせていただきたいというのが切なる願いである。

加藤委員：委員長のおっしゃることはよくわかる。白老もどちらかというスケールは大きく、国有林なりそういうものを幅広く考えようと思っているが、なかなか急には難しい。植栽も定期的に追いつめられてやっていた部分もある。

佐々木委員長：そうして欲しいというのは私の考えだが、先ほども申したように、今年度は国の決定が遅れ、ぎりぎりだったので、白老町を責めるわけにはいかない。検討委員会も1年早めて前倒ししたことは良かったのだが、それだけに時間の余裕がなかったことも事実である。ただ、今の計画を見る限り、事情はいろいろあるが時間的・空間的なスケールが足りなかったため、今後は時間的・空間的にスケールのある計画を、アイヌ文化振興財団を中心に考えていただく必要がある。

加藤委員：推進体制で、事業の主体がアイヌ文化振興財団であるということは、私としては本来そうだと思う。

事務局：加藤委員はアイヌ文化振興財団の副理事長という立場でもあり、アイヌ文化振興財団が中心となってアイヌの人たちの意向を踏まえつつ進めていくので、加藤委員にも副理事長として指導いただくようお願いしたい。

加藤委員：わかりました。

事務局：総括をすると、本日は白老町から実施状況の説明があり、アイヌ文化振興財団から19年度事業実施計画の説明があった。次回は、各委員の意見を踏まえて肉付けした実施計画をアイヌ文化振興財団から説明いただき、19年度の事業実施に向けて進めていきたい。

佐々木委員長：つまり、資料1で説明したのは来年度の実施計画の骨子であり、それに加味して、もちろん白老町とも相談をしながら、あるいは加藤委員の指導もいただきながら、もう少し肉付けした実施計画を次回に提出して議論をするということによろしいか。

佐々木（利）委員：遅参して申し訳ない。説明を十分に伺っていないので、こんな質問をするのもおかしいが、例えば白老町の中の連絡ネットワークというか、町と支部とアイヌ文化博物館の関係はどのようになっているのか。十分に機能して、来年度の事業に向けて白老町内でのネットワーク化というのかなり充実した方向に行っていると考えてよいのか。

白老町（久慈参事）：町内でイオルの企画推進委員会を設けており、これは今佐々木委員がおっしゃったアイヌの方々の主要なメンバーが入っている。このような中でいろいろな意見を聞きながら取り進めている。

佐々木（利）委員：白老町内のネットワークに関しては心配ないということか。

白老町（久慈参事）：この委員会については、18年度の事業の結果を報告していろいろな意見をいただいております、また19年度も進めていきたいと考えている。

事務局：本年度初めてという中で、かつ何でも白老町役場という形になってしまったので、19年度は既に準備を進めている。アイヌ文化振興財団は白老町にも行って、佐々木委員がおっしゃったような関係者とも話し合っているので、19年度はアイヌ文化振興財団が中心になって、そのネットワークをより機能していくような形にしていきたい。

佐々木委員長：では、第2の議題に移りたい。

イオルのネットワークについては、従来アイヌの皆さんからいろいろな意見が出ており、私からも加藤委員にネットワークづくりに協力をお願いしていた。これについて、まず事務局の方から説明していただく。

事務局：資料2でネットワークの議論の進め方を再確認したい。これは実施要領に基づき、ネットワークの議論を進めるに当たって、どのような論点があるのか整理したものである。

（資料2に基づき説明。）

佐々木委員長：ネットワークについては、もともとアイヌの方々の中で七つの地域が手を挙げているわけです。そのような意味で白老だけではなく、次のイオルの地域を少しずつ増やしていくという方向に進んでいくことは、私はアイヌの方々の意向だと思っている。それを踏まえた上で、では次どこから手をつけるのか、加藤委員の方でアイヌの方々の意見をまとめていただきたいということを申し上げていた。そして、その中から出てきた地域がネットワークの形成上どのような意味があって、本当に必要なのかということをもう1回きちんと議論をしていくことが必要だと思うのです。いずれにしても、加藤委員からアイヌの方々の意向というのを、もし決まったものがあれば教えていただきたい。

加藤委員：先日、ウタリ協会で会議を開催して、いろいろな議論をしながら、やはり北海道会議の時に白老が一番目で、1票差で平取だったことを尊重しようということから始めたので、異論のある人はいたが、今回は平取ということに決めさせてもらった。中身はこれからの話だと思うが、ネットワークをどのように分担するかということもあるし、白老を3年ぐらまで重点に置いて、そして20年から平取が並行して、どの程度でやっていくかということになる。その時に出了一个話の中で、では、平取を並行するということは、今1億円ぐらいの予算が付いているが、やはり平取でやるものはそれに加算されなければならない。それはそこで引き算になっては全然ものにならないので、このことについては慎重にこれからも加算していただきたいと思っている。

佐々木委員長：いろいろな意見があったというのは結構ですが、平取ということが決まった時には、皆さんの意見で平取ということに一致したのか。

加藤委員：一致した。いつまでもアイヌが場所の引っ張り合いをしていては、事は収まらない。

佐々木委員長：全体で、まだ先に送るという意見がなかったということは何よりだと思う。平取ということで、その内容を次に説明していただき、それについては改めて少し議論をしないとい

けない部分もあるかと思う。とにかく平取ということが決まったということ承ったが、川奈野委員はいかがか。

川奈野委員：以前に北海道会議で決定されたことについて、一応これを参考にしながら現在に至っているので、第2の候補地として平取にやらせて欲しいとお願いして、皆さんに承諾いただいた。今後はこのネットワークについて、平取としては、あるもの、ないものがいろいろあるわけであるが、できるだけあるものは残すようにしながら、今後はみんながイオルをできるように私たちも努力していきたいということを申し上げたので、よろしく願いしたい。

加藤委員：もう一つ、平取がそのように決まった後、その次も必ずある。それで、次が出てきたら後のところをどうするのだということになったが、この後のことについては22年までに、このことは先ほどもちょっと触れた部分はあるが、アイヌ文化振興財団の方で平取も検証しながら、後の手を挙げているところも何が必要になっているのか現場できちんと見た上で、旭川なり帯広なり釧路なり静内なり札幌なり、札幌ではどのような素材があればよいとかあるので、そのことをきちんとわきまえた上で、22年までにどれだけ進めるかをこれから検討してやるということにしている。

佐々木委員長：どのようにしたらよいか。例えば将来そのようになっていく時に、どのようなところがなり得るかということも、アイヌ文化振興財団の方で、今年からということではなく、来年から再来年くらいから地域の皆さんの意見を聞いていただくというのも一つの方法である。

佐々木(利)委員：後は、白老のある程度の見通し、それから平取の方向性というか、それを見るほかの地域に対してもっと具体的にこういった方向だということができると思う。

佐々木委員長：いよいよ平取の計画もあわせて動き始める。だから、来年、再来年くらいは、今度は平取がどのようになっていくのか、白老がどのようになっていくのかということを見ていかなければならないが、その過程で次がどうなのかということも、おいおいアイヌ文化振興財団の方で検討して、だんだん絞り込んでいくという作業がないと、ほかの地域の方々が非常に疑心暗鬼になっても困る。だから、当面はアイヌ文化振興財団の方で主体的に今の意見を受けとめていただいて、そのような意見を聴取しながら次へ行く材料を少しずつつくっていくことを考えていただきたいと思います。今すぐということにはならないのではないか。

それで、22年度までという先行きの話はあるが、こうして平取という名前が出てきた。「アイヌの伝統的生活空間の再生に関する実施要領」の抜粋のところを読むと、ネットワークについては最終的に推進会議で決めることになるが、その推進会議で決めるに当たっては、先行地域における実施状況等も踏まえ、学識経験者、アイヌ文化伝承活動実践者等の意見を聴き、定めるものとするということが載っている。この意見を聴くというのは、具体的にはこの委員会に当たるものである。そこで、私どもとしてはウタリ協会の側から平取がよいという意見をいただいたが、言葉は悪いが、平取はどの程度よいのか。つまり、いずれ財務省に予算を要求するわけだが、彼らを納得させる案でないといけなのだが、それは地元が考えた案がそのままよいかどうかはわからない。これはワーキンググループでも設置して、平取が持っている案をそのワーキンググループでよく審査していただく必要がある。最終的には、事務局がこれなら大丈夫だというような案にまでもっていかなければならない。そのためには、しかるべき方々に加わっていただき、平取の案を練り上げて、そしてその案を推進会議で認めていただき、概算要求の案とする。という順序にしていきたいと思う。

加藤委員：それでよいと思う。

佐々木委員長：佐々木委員もよろしいか。それでは、そのような手順に従ってワーキンググループを構成したいと思います。ワーキンググループの構成は、ここで人選をするのもどうかと思うので、加藤委員と川奈野委員と佐々木委員の3人に一任して、後で相談していただくというこ

とでいかがか。3人のワーキンググループではなくて、3人に何人かを追加してワーキンググループをつくっていただくということはいかがか。

各委員：よい。

佐々木委員長：事務局もそれに加わっていただいて、これはあくまでも事務局が加わらないと、我々は一致団結して事に当たらなければならないので、そのような点で事務局に要求を突きつけても仕方がない。ここはみんなと一緒に考えて、よい案をどうつくるかということで頑張りたいと思うので、よろしく願いたい。

事務局はいかがか。

事務局：委員長からワーキンググループという意見を頂戴したので、アイヌ文化振興財団にワーキンググループを設置して、加藤委員、川奈野委員、佐々木委員と相談していきたい。

佐々木委員長：平取のプランは、20年度の概算要求に反映するとすれば取りまとめは6月末か、7月初めか。

事務局：事業実施主体であるアイヌ文化振興財団から要望を聞いてまとめていくというスケジュールもあるので、できれば6月中にと思っている。

佐々木委員長：このようなものは長く検討すれば、それだけ素晴らしい案ができるかというところでもない。私の経験から言うと、試験勉強と一緒に、集中的にやればできるので、それを1カ月先に延ばしたから素晴らしいものに生まれ変わるということは余りない。

そのような点で、白老の場合は余りにも検討期間がなかったが、今回は例え3カ月でも4カ月でも試験勉強の期間をおいて、しかるべく魅力ある案をつくっていただければと思う。

加藤委員：もう一つ、例えば各所に博物館があり、札幌市も平取町も白老町も持っているし、ほかにも持っているところはあるが、イオルをやるといって、この博物館が一緒になるように感じる。私はこの博物館、要するに企業がやっているようなもので、例えば個々に持っている人もいるだろうが、それをイオルの中に入れて、あの博物館はイオルのつくり上げた存在だという感じで見ているが、それに対して、個々に委託するとかではなくて、博物館本体自体の管理運営のための費用をこのイオル事業から見る必要があるのではないか。

事務局：個々の管理委託の中で博物館に委託するものもあるが、加藤委員からお話があったのはそうではなくて、もうちょっとまとめ上げるという話だと思う。博物館というのいろいろあるので、どうしていくのが一番よいのかというのは、やはり随分議論をしないとイケないと思う。白老町の場合でも、白老町の博物館として、イオルとは別の意味の目的で建てられたものであり、それは白老町役場としての考えもある。それをイオルで支援すると、すべてがイオル事業ということになってしまう。アイヌ文化振興財団が中心になって、関係者と議論していく中できちんと決めながら様子を見ていく方がよいと思う。

佐々木委員長：もともとイオルの予算は、事務局として二人が出てきているように、文化庁と国土交通省の共管であり、博物館という問題は文化庁の所管に関わってくるが、文化庁としてはいかがか。

事務局：博物館は各地区にあるが、それぞれに主体が異なり、また、それぞれの博物館自体の目的がいろいろある。たまたま北海道にあるもので、資料としてはアイヌに関するものもあるということで、共通点はたぶんあると思う。ただ、それをもって博物館なり資料館に、イオル事業としてアイヌ文化振興財団から支援するというわけにはなかなかいかないのではないか。

佐々木委員長：もっと具体的には、個別の博物館でイオルに合うような事業を行うというような形で、そういう事業に対して一定の補助的な、イオル側の事業として認めていくことをしないと、いきなり博物館をとというわけにはならないのではないか。その理由づけが考えどころである。

佐々木(利)委員：個人的に申し上げると、文化庁の方針には反するが、私はアイヌ国立博物館が

必要だと思う。文化庁は、一応4つの国立博物館をつくって終わったと言っているが、あれは日本文化については終わったということである。

佐々木委員長：それは、さっきからの人材養成という話とも関係するが、実を言うと、「アイヌ研究推進センター」という大きな構想があり、その中にはアイヌ文化学院というものも入っていて、そこではご存じのようにアイヌに関するいろいろな芸術伝承など、アイヌ文化に出会えるようなものである。

私は先日、アイヌ文化振興法10年というペーパーを書いたが、短いのでイオルのことしか書けなかった。アイヌ文化振興法をつくったときに幾つかの問題を積み残しており、その一つがイオルだったわけで、正直に言うとイオル一つで全部が満足いくわけがない。だからといって、全部イオルに突っ込むと無理がある。本当はそういうアイヌ文化学院というものを別途きちんとすることで論理も成立するし、うまくいく。そのようなものをいろいろ整理しないと、たまたまイオルというものが出来たからといって、そこに残ったものを全部入れていこうというのは大変無理がある。

佐々木(利)委員：地元にある博物館の努力は仰がなければならないので、これを有効に活用して、そしてすごく強力なネットワーク体制をつくり上げて、それで考えていけばよいのではないか。

加藤委員：ポロトのアイヌ民族博物館は、ロケーションも景観もよいので、そのようなものを白老のイオル構想の中で有効に活用していけばよいと思っている。そのようなものをきちんとネットワーク化できた時に、佐々木委員の言う国立博物館ができるのではないかと思っている。

佐々木委員長：いずれにしても、国立博物館の問題は、イオルとの関係ではなく、先にも述べた「アイヌ研究推進センター」の設立構想と関係させて別に論じてください。

ほかに、オブザーバーの方々でも意見があればどうぞ。

白老町(煤孫助役)：一つよろしいか。先ほどの話の中で、イオルの今後については、平取町というような方向性があった。白老町の実態としては、先ほど委員長が言われたように、18年度から時間のない中で始まったということで、なかなか形として十分に応えられていないのではないかと思っているが、これから平取町と並行して進めるときに、やはり予算の関係が問題として出てくると思うので、白老町も今後関係整備をするためのお金ということと、それから平取町も並行してやれるような、そういう財源確保というのが非常に大事ではないかと思っている。そのことだけこの会議の中で私どもからお話しさせていただきたい。

佐々木委員長：特にそのような発言があったということで、これはまた皆さんいろいろとあるだろうし、また北海道との関係もあるだろうし、なかなか難しいと思うが、その辺は事務局の方で事務的に処理していかなければならない。アイヌ文化振興財団の中でも、財団本来の事業費と新しいイオルの事業費との関係という議論があり、これは加藤委員も財団の副理事長であるので、その辺のこともいろいろあると思うが、今日ここで議論して何か結論づけるものではないので、そのような意見があったということにしたい。

白老町(煤孫助役)：よろしくお願ひしたい。

北海道ウタリ協会(佐藤事務局長)：先ほど加藤理事長からも話があったが、今月23日にウタリ協会のイオル推進委員会が開催された。その際に特に言われていたこととして、本格的に、本当の意味の技術を身につけるとなると、実際にその材料を見極めるとか、あるいは文化の背景を総合的に身につけるという専門的な文化の伝承活動が必要である。今の財団の事業でもそのようなところの周辺部分は広がってきているが、やはり重点的にその素材とアクセスできる、あるいは本当の森や川、海とアクセスできるという中で伝承活動を組んでいく必要があるので、イオル事業の中でそのような視点をぜひとも持ってほしい、ということをお話していた。



文化伝承の背景とか環境をつくる意味では、やはり人が技術を次代にハンドダウンしていくことが非常に貴重だということで、オブザーバーの立場でお話ししておきたい。

佐々木委員長：もともとアイヌ文化を伝承するための自然空間の再生というところでイオルの話が出てきているのだから、できるだけイオルに取り込めるものは取り込めばよい。それを取り込むことに私は反対しないが、本格的にやるならアイヌ文化学院みたいなものをきちんとつくて、そこでそういう人を専門に育成していくことを考えないと、何でもかんでもイオルでやろうというのは無理が生ずるような気がしている。

事務局からほかに何かあるか。

事務局：次回の予定は、3月29日の木曜日、午後に東京で開催させていただく。そこでは、一つは白老の19年度の実施計画案、もう一つはネットワークの検討の方向性、その二つの議題を考えている。その後、委員長から6月くらいという話もあったので、ネットワークの検討について、6月にまた皆さんの日程とか検討状況も踏まえながら諮問委員会を開催したい。

佐々木委員長：それでは、少し時間が早いですが、これで終了させていただく。ワーキンググループの相談がこの後あるそうなので、なるべく早めに終わっておいた方がよいと思う。

次回は3月29日の午後1時半からということで、よろしく願いしたい。

(以上)